

イギリスの優位と欧米国民国家の形成

産業革命と環大西洋革命以後、欧米諸国は近代工業と国民^{しゅげん}主権をめざす政治改革によって国民国家の統合力の強化を進め、アジア諸地域もそれに^{へんよう}対応する変容をうながされた。

Q 国民国家と近代市民社会の形成は、欧米諸国においてどのように進んだのだろうか。

ウィーン体制とヨーロッパの政治・社会の変動

1

Q ウィーン体制のもとで、ヨーロッパはフランス革命前からどのように変化したのだろうか。

ウィーン会議

Q ウィーン会議の参加者たちは、何をめざしていたのだろうか。

① ウィーン会議では列強間の非公式協議で重要な決定がなされ、全参加国による総会は一度も開かれなかった。

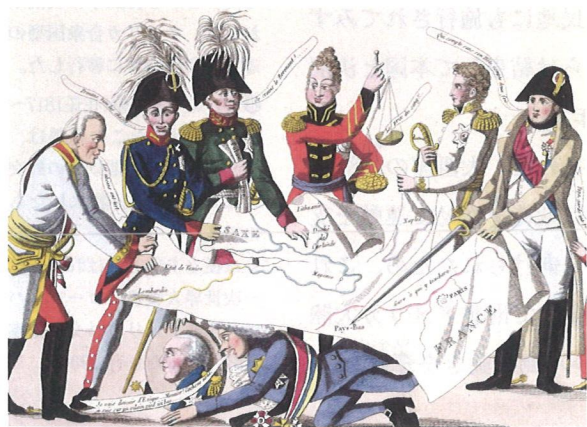
ウィーン会議 会議における列強諸国の利害調整は難航した。図は、主要国の国王たちが会議において領土分割で争っていることを皮肉ったもの。1815年のナポレオンの動向を反映して、会議に参加していない彼も右端に描かれている。なお、右から4人目がアレクサンドル1世で、地図の下の人物はタレーラン。

1814年から15年にかけて、フランス革命・ナポレオンの大陸支配による激動の事後処理と新しい国際秩序の協議のため、オーストリアの首都ウィーンで国際会議が開かれた(ウィーン会議)。会議にはオスマン帝国を除く、全ヨーロッパの支配者が参加したが、それは過去四半世紀間におこった変動の大きさを反映していた。

会議の議長となったオーストリア外相(のち宰相)メッテルニヒ^{Metternich 1773~1859}は、ナポレオン支配の打倒に決定的役割を果たした列強間の意向のもとに協議を進めた①。フランスのタレーラン^{Talleyrand 1754~1838}外相は、革命前の旧体制への復帰をめざす^{せいとう}正統主義となえ、^{ブルボン}ブルボン王家の復帰を認めさせた。しかし、ほかの列強は激動後の現実に立って、正統主義よりもヨーロッパ世界の

安定と自国領土の拡大を重視した。列強のなかでは海軍力・工業力にまさるイギリスと、強大な陸軍を保有するロシアが大きな影響力をもった。

会議の結果はウィーン議定書にまとめられ、ロシア皇帝はポーランド国王を兼ねて支配領域を西方にのばし、プロイセンも東西に領土を拡大した。オーストリアは、オーストリア領ネーデルラントを立憲王国となったオラン



ダにゆずったが、イタリア北部地域を併合して、自国領域の統合を果たした。スイスは永世中立国となり、ドイツには

はオーストリア・プロイセンや諸領邦の君主国、ハンブルクなどの自由市をゆるやかにまとめたドイツ連邦が成立した。一方、イギリスは大陸での勢力均衡を実現させて本国の安全を確保し、旧オランダ領のセイロン島やケープ植民地などを得て、世界帝国への基礎を固めた。ロシア皇帝アレクサンドル1世はヨーロッパのほとんどの君主を参加させて、キリスト教精神にもとづいて友好を約した神聖同盟を結成した。

会議で成立した国際秩序はウィーン体制と呼ばれ、ロシア・イギリス・プロイセン・オーストリアが結成した四国同盟の列強がこれを支えた(列強体制)。列強体制は、ナポレオンの大陸支配の経験から、一国だけがヨーロッパの覇権を握ることを阻止し、列強が協調してヨーロッパの国際秩序を維持して国際問題を調停するシステムであり、19世紀半ばの一時を除いて、20世紀初めまで存続した。そのため、ほぼ1世紀のあいだ、ヨーロッパ中心部では比較的平和で安定した国際環境が維持され、先進地域での近代化と市民社会の発展が進むとともに、19世紀後半にはヨーロッパ列強は非ヨーロッパ世界への帝国主義的支配に向かうことになった。

立憲改革の進展とウィーン体制の動揺

❶ ウィーン体制を動揺させた政治・経済・社会的要因は、それぞれ何だろうか。

メッテルニヒらはウィーン体制を守るため、保守主義を掲げ、自由主義的改革運動やナショナリズムの運動を監視し、思想統制や蜂起・革命の武力制圧を実行した。しかし、改革・独立運動はおさまらず、ドイツの学生団体(ブルシェンシャフト)やイタリアのカルボナリなどの結社による自由主義的改革運動、スペインの立憲革命、さらにロシアでのデカブリスト(十二月党員)の反乱などがあいついだ。これらの動きはい



ウィーン会議後のヨーロッパ (1815年)

❷ 1818年にフランスが加わって五国同盟になった。

❸ 現行の政治・社会体制とその基礎となる思想の正当性をとなえ、それに対する批判や改革を求める思想・運動を否定する考えや運動。19世紀ではおもに自由主義と対決した。

❹ 国民や民族といった歴史的共同体を重視し、「国民国家」(→p.213)の創出を主張する考えや運動。フランス革命後、ナポレオンの支配下におかれたヨーロッパ各地でまず広まり、19世紀では勢力均衡の考えと対立した。



「民衆を導く自由の女神」^{めがみ} ドラクロワ作。1830年のフランス七月革命^{しちがつ}を題材とし、女神は三色旗^{さんしき}と銃^{じゅう}を手に持っている。ロマン主義^{ろまんしぎ}絵画^{えが}の代表作の1つ。

※1 イギリスはカニング外相のもとで独立を支持した。またアメリカ大統領もモンロー宣言でアメリカへのヨーロッパの干渉に反対した。

①自由主義は、大陸ヨーロッパ諸国では憲法と議会の確立を目的としたが、イギリスでは、個人の自由な活動を重視し、それに対する障害を除くことをおこなった。

ロンドン会議で独立は国際的に承認された

ずれも鎮圧^{ちんあつ}されたが、1821年から始まったオスマン帝国内のギリシア独立運動^{ギリシア}は、地中海やバルカン地域に利害関係をもつ列強^{れつきやう}の支持で、30年に独立を達成した。

こうした改革・独立運動は中南米にも波及^{きわ}した。メッテルニヒはこの動きも阻止^{そし}しようとしたが、イギリスが中南米市場の開発を期待して独立を支持するなど列強の足なみが乱れ、失敗した。

ブルボン朝^{ぶつぽん}が復権^{ふっけん}したフランスでは、

絶対王政への復帰はできず、立憲君主政^{りつけん}の統治になったが、きびしい制限選挙による反動政治が続いて国民の不満を高めた。ルイ18世を継いだシャルル10世^{Charles X}は、1830年アルジェリア遠征によって国民の批判をそらそうとしたが、同年パリで七月革命^{しちがつ}がおきて国王は亡命した。後継の王には自由主義的とされたオルレアン家のルイ＝フィリップ^{Louis Philippe}が推され、七月王政が成立した。七月革命の影響は各地に広がり、ベルギーはオランダから独立して翌31年に立憲王国となり、ポーランドやイタリアでも独立をめざす蜂起^{ほうき}がおこったが失敗した。しかし、西欧諸国はメッテルニヒの抑圧的な保守主義に協調なくなり、ウィーン体制の反動政治はオーストリア・ドイツなどの中欧・東欧地域に後退した。

ドイツでは、ウィーン会議以前からプロイセンの農民解放や諸領邦での立憲政治が広がり、古い領主制・身分制・職業規制の廃止も進み、農民や職人層の自由が拡大した。1830～40年代、フランスやドイツで鉄道建設事業が着手され、近代工業も育成されはじめ、市民層も統一的な国内市場の実現に関心を向けた。1834年には、プロイセンを中心にオーストリアを除く大部分の領邦が参加して、ドイツ関税同盟^{かんぜい}が発足した。

イギリスの自由主義的改革

Q 19世紀イギリスの政治的变化は、大陸のヨーロッパ諸国の場合とどのように異なっていたのだろうか。

産業革命によって世界経済の中心となり、ナポレオン戦争でも勝利した19世紀のイギリスでは、国内で様々な自由主義的改革^{かんぜい}が進められた。イギリスはアイルランドと国家合同(1801年)して連合王国となっていた

ため、プロテスタント^{こっきょうと}非国教徒^{ていこくせうと}やカトリック信徒への法的制約を最終的に撤廃して^{ていばい}③、信仰を自由化した(1828～29年)。また、奴隷制への批判も高まり、1807年に奴隷貿易を禁止し、さらに33年には植民地を含めた全領土で奴隷制自体を廃止した④。

イギリスは、1832年の第1回選挙法改正によって選挙制度も改革し⑤、産業革命で成長していたブルジョワが国政に直接参加する道を開いたが、政治の実権は依然として国会議員の大多数を占めた地主階級^{じぬし}の手中にあった。一方で労働者階級は、男性普通選挙制や議員の財産資格撤廃を要求に掲げて^{Chartist}チャーティスト運動を展開したが、直接の成果を生み出せなかった。貿易も重要な改革領域であり、1813年に東インド会社の特権^{とっけん}がインドとの貿易独占に関して廃止されたのち、33年には中国貿易の独占が廃止されるとともに、貿易活動そのものも停止された(翌34年に実施)⑥。他方でイギリスは46年に穀物法を廃止し⑦、49年には航海法^{→p.191}も廃止したことにより、自由貿易体制のもとで農業よりも工業を優先する国家へと方向を定めた。

社会主義思想の成立

Q イギリス・フランス・ドイツにおける社会主義思想はどのように比較できるのだろうか。

資本主義のものとのヨーロッパ諸国では、全体としては生産力が増大し^{→p.208}

てモノが豊かになった一方、身分間の法的な格差にかわって、富を蓄えた資本家と低賃金のままの労働者との経済格差が新たな問題となった。

労働者はストライキや暴動^{ほうどう}などで資本家に対抗したが、一部の知識人は、経済体制自体に矛盾があると考えて、これを是正する理論を模索し、実践も試みた。彼らの思想は総じて社会主義と呼ばれた。

イギリスの^{Owen}オーウェンは、労働組合運動を指導したほか、労働者が工場経営や生活必需品の購入を共同でおこなう協同組合を組織した。彼は児童労働や夜間勤務の禁止もとなえ、その提言は1833年の工場法に部分的ながら反映された。

フランス⑧では、^{Saint-Simon}サン＝シモンが、労働者は職種をこえて全国的に連帯し社会の主役になるべきこととなえ、^{Louis Blanc}ルイ＝ブランは、国家の管理のもとで各人が能力に応じて働き、利益は平等に分配される経済体制を構想した。また^{Proudhon}プルードンは、労働者の自発的な結合が将来的に国家に取っ^{1809～65}

②かつてのピューリタン(→p.191)をはじめとする、プロテスタントでありながらイギリス国教会に属さない信徒。ブルジョワ階層に多く、一定の影響をもっていた。

③カトリックへの法的制約の撤廃に際しては、アイルランドでオコンネル(1775～1847)が率いた抗議運動が大きな役割を果たした。

④イギリスに続いてアメリカやフランスも奴隷貿易を禁止したが、両国領での奴隷制はその後も存続した。

⑤この改革による有権者の増加は小さかったが、^{めいとう}名誉革命(→p.191)以来ほぼ変更のなかった選挙区制度が大きく改められた結果、「腐敗選挙区」と呼ばれた極小選挙区が廃止され、1票の格差は縮小した。

⑥この結果、多くの商人が中国貿易に参加することになったが、中国は自由貿易を認めていなかった。そのために生じた不満が、イギリス国内でのアヘン戦争への支持の一因となった。

⑦穀物法は、外国産穀物の輸入を制限することで国内の農業生産者を保護する目的があったが、他方でパンの値段が下がりにくくなり、工場労働者などの消費者にとっては不利益に働いた。

⑧フランスの社会主義者は、資本主義の先進国イギリスを意識しながら未来社会を考えたため、彼らの理論は急進化する傾向が強かった。



マルクス

てかわること(無政府主義)で、私有財産制の不平等を^{やわ}和らげることができるとした。

社会主義思想を集大成したのが、ドイツの^{Marx}マルクス(1818~83)と^{Engels}エンゲルス(1820~95)であった。彼らは『共産党宣言』(1848年)を公刊して、土地や工場、銀行など経済の重要な要素を公有化するための社会革命が必要であると説いた。その後、マルクスは『資本論』(1867年に第一部)を著して、資本主義においては、労働者は自由な立場で労働してもその報酬を完全には受け取れない仕組み(搾取^{さくしゅ})があり、他方で資本家も利潤を無限に拡大することはできないため、こうした無理のある経済体制はいずれ崩壊すると論じて(マルクス主義)、大きな影響を与えた。また、両者は19世紀後半に労働者階級の国際的な連帯と革命運動を指導した。

なお社会主義とは別に、慈善団体やキリスト教の教会は、生活改善や自助努力を労働者にうながすことで、彼らの境遇の向上を試みた①。

①とくに飲酒の問題は重視され、各国で禁酒運動が組織された。

1848年革命

Q ヨーロッパにおいて、1848年革命の影響を受けなかった国や地域はどこだろうか。

19世紀前半におけるヨーロッパの近代工業はなお発展段階で、旧制度から解放された貧しい農民や都市の下層民衆に、十分な雇用機会を提供できなかった。さらにこの時期はヨーロッパ全体で人口が上昇したため、

トクヴィルによる1848年1月の議会演説(抜粋)

議員諸氏よ、……労働者階級のなかでおこっていることに注目していただきたい。……そこでは人びとが、彼らより上層の者たちは彼らを統治する能力を失い、その資格もなくなっていると、くり返し語っているのを聞きにならなかっただろうか。……富の分割は正義に反するとか、所有は公正ではない基盤の上に支えられているといったことが、たえず言われているのを御存知ではないのでしょうか。そしてこうした見解が……大衆の底辺にまで浸透していったとき、……遅かれ早かれ最も恐るべき革命が引き起こされるに違いない、ということをお信じにならないのだろうか。……われわれは活火山の上にいるのに眠り込んでいるのだと思う。

(喜安朗訳『フランス二月革命の日々——トクヴィル回想録』)

貧民層も増えて「大衆貧困」と呼ばれる深刻な社会状況が広がった。こうした背景のもと、ヨーロッパ各地で政府や富裕市民層の責任を問う革命的気運が高まった。

七月王政下のフランスでは、銀行家など一部の富裕層に富が集中し、多額納税者だけに選挙権を認める制限選挙による政治がおこなわれていた。それに反発した中小市民層や一般民衆のあいだには選挙権拡大運動が広がり、政府がこれを力でおさえようとする、1848年2月にパリ

Q トクヴィル(1805~59)は、アメリカ合衆国の民主主義を考察して、自由主義者に影響を与えたフランスの政治家・政治学者である。ここでいわれている「活火山」とは具体的に何のことだろうか。

で**二月革命**がおこった。革命の結果、七月王政は倒れて共和政の臨時政府が樹立された(**第二共和政**)。臨時政府には社会主義者の**ル**

イ＝ブランや労働者の代表も入ったが、男性

→p.223

普通選挙制を実現させた市民層や農民は急進的な社会改革を望まず、選挙の結果、**穏健共和派政府**が成立した。パリの労働者はこれに反発して蜂起したが、制圧された。同年12月

の大統領選挙ではナポレオン1世の甥の**ルイ＝ナポレオン**が当選した。

Louis Napoléon
1808～73(在任1848～52)

彼は51年、クーデタによって独裁権を握り、52年には国民投票で帝政を復活させ、**ナポレオン3世**を名乗った(**第二帝政**)。

Napoléon III
在位1852～70

二月革命はまもなくオーストリア・ドイツにも波及し、**三月革命**となった。オーストリアでは**メッテルニヒ**が失脚し、プロイセンでは国王の

譲歩で自由主義的政府が成立して、ウィーン体制は消滅した。その後、

ドイツ諸邦の自由主義者らは統一国家と憲法制定のため、**フランクフル**

ト国民議会に結集した。また、オーストリア帝国内のハンガリーやバーメン、イタリアでは、独立を求めるナショナリズム運動が広がった。こうした自由主義的改革運動と独立・自治を求めるナショナリズムが高揚する状況は、「諸国民の春」と呼ばれ、**1848年革命**とも総称される。

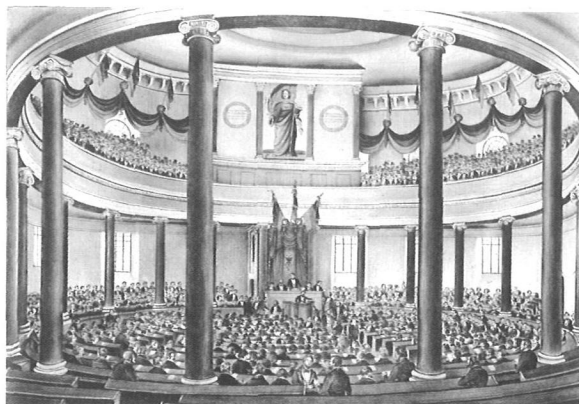
1848年革命は全ヨーロッパ的規模でおこったが、西欧諸国では国内の自由主義的改革が、東欧地域では民族運動による自治や独立の実現が主要目的で、相互の連携は少なく、以後東・西ヨーロッパがそれぞれ異なる政治・社会的方向に進む分岐点となった。

革命運動内の分裂や対立をみて、一時後退した王権や保守勢力は反撃

に転じた。プロイセンでは、国王がフランクフルト国民議会のドイツ皇帝推挙を拒否して、1850年には一方的に欽定憲法を發布した。一方、オーストリアやロシアは、多民族帝国を動揺させる民族運動を警戒した。

ロシアはオーストリアに支援の軍を派遣してコシュートらの率いるハンガリーの民族運動を制圧したので、反革命の擁護者として「ヨーロッ

パの憲兵」と呼ばれた。国内の革命運動をおさえたオーストリアは、一時認めた欽定憲法も撤回して、反動的な「新絶対主義」体制に移った。



フランクフルト国民議会 全ドイツから選挙で選ばれた代表が、フランクフルトのパウロ教会に集まり開催された。

・19世紀前半、皇帝ニコライ1世のもと南下政策を進めるロシアは、1831年に始まったエジプト＝トルコ戦争に干渉した

列強体制の動揺とヨーロッパの再編成

2

Q▶ 1850～70年代のヨーロッパ諸国の変革には、どのような共通点があったのだろうか。

クリミア戦争

Q▶ クリミア戦争において、ロシア・イギリス・フランスはそれぞれ何を求めたのだろうか。

クリミア戦争 クリミア半島のセヴァストポリ要塞は、イギリス・フランス艦隊の攻撃によって1855年に陥落した。

ロシアは反革命の擁護者として国際的に有利な立場に立ったことから、伝統的な南下政策を再開し、1853年にはギリシア正教徒保護の名目でオスマン帝国に宣戦した(クリミア戦争)。イギリス・フランスはロシ

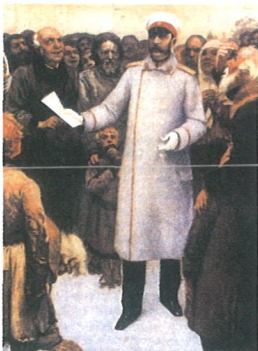
アの地中海進出を阻止するためオスマン帝国を支援し、戦争はヨーロッパ列強同士の戦いになった。クリミア半島のセヴァストポリ要塞をめぐる攻防の末にロシアは敗れ、56年のパリ条約で黒海の中立化と1840年のロンドン会議の取決めに再確認させられ、南下政策を一時中断した。

クリミア戦争後、ロシアは国内改革に、またイギリスはインドの大反乱への対応に追われ、ほかのヨーロッパ諸国も国内の政治・経済体制の整備に専念した。そのため国際問題での列強間の共同行動は難しくなり、列強体制の統制力は弱まった。それにより、1850～70年代は列強の干渉や規制から比較的自由な国際環境が生まれ、国内改革や国家統一など国境線の変更を引き起こすような大きな変革や内戦を含む戦争が多発した。

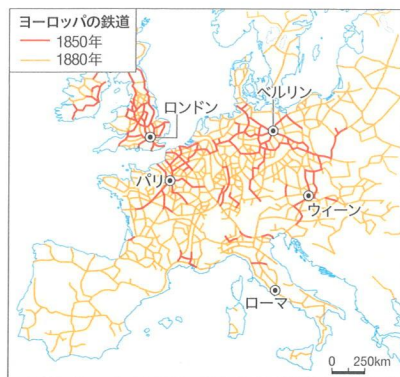
列強の新体制——ロシア・イギリス・フランスの対応

Q▶ 3国の諸改革にはどのような相違点があり、またその理由はそれぞれ何だろうか。

農奴解放 アレクサンドル2世(中央の白いコートの人物)は、ロシアの後進性は農奴制にあるとして、1861年3月農奴解放令を布告した。それを象徴的に表現した画。



〈ロシアの大改革〉 クリミア戦争で敗北したロシアのアレクサンドル2世は、専制体制と農奴制によるロシアの立ちおくれを認め、1861年に農奴解放令を布告して、農奴に人格的自由を認めた。農民は土地を貴族領主から買い戻す必要があり、また土地は個人にではなく農村共同体(ミール)に引き渡されることが多かったが、これによって、皇帝は農民を直接支配下に組み込むことができた。その後、皇帝は地方自治や教育制度などの近代化改革を実施したが、改革の気運に乗じてポーランドの民族主義者が蜂起すると、再び専制政治に戻った。



	イギリス	ドイツ	フランス	オーストリア
1825年	43	—	—	—
1835年	544	6	141	—
1845年	3931	2143	875	728
1855年	11744	7826	5037	1588
1865年	18439	13900	13227	3698
1875年	23365	27970	19357	10331
1885年	26720	37571	29839	13329
1895年	28986	46500	36240	16420



19世紀ヨーロッパにおける鉄道網の発展(上)と鉄道距離の推移(下) (km、Historischer Bild-Atlasより)

第1回万国博覧会(ロンドン) 万博の会場は水晶宮と呼ばれる鉄骨とガラス造りの巨大な建物であった。また会場には、当時の最先端技術によって製作された、イギリスの様々な物品が展示された。

工業がなお未成熟であったロシアでは、労働者層は少なく、社会改革の提唱者は都市の学生などの知識人層(インテリゲンツィア)が担った。

彼らの一部は農民を啓蒙し、農村共同体を基盤にすれば社会主義改革が可能と考え、「ヴ=ナロード(人民のなかへ)」を掲げて農民に働きかけたのでナロードニキと呼ばれた。しかし農民は呼びかけにこたえず、失望したナロードニキの一部は要人殺害で専制を打倒しようと、皇帝や政府高官を暗殺した。

〈イギリス〉 19世紀のイギリスは、世界各地との貿易を拡大し続け、世界最大の商船隊と最強の海軍を維持した①。さらに蒸気鉄道が全国に普及し、地下鉄も開通した。蒸気鉄道は同世紀半ばから世界各国に輸出され、電信の発達とあわせて地球上の交通・通信に革命的な変化をもたらした(交通革命・通信革命)。首都のロンドン是世界最大の都市となり、商業および金融を通じて世界経済に大きな影響力をふるった。このため、イギリスの通貨であるポンドが世界の基軸通貨として用いられるようになり、また、ロンドンのグリニッジ天文台の時刻が世界標準時とされた。

イギリスの力の象徴となったのが世界初の万国博覧会の開催(1851年)であり、国内のみならずヨーロッパ諸国からも多くの見物客が訪れた。こうした実力を備えたイギリスが、大陸ヨーロッパとは直接に関与

① イギリスは全世界の商船の3分の1を保有し、19世紀後半に蒸気船が主流となっても、この優位を維持した。



ヴィクトリア女王 その治世
はイギリスの最盛期にあたり、
1877年からはインド皇帝を兼
任した(→p.248)。

①自由党はホイッグ党を、保
守党はトーリー党を起源として
いた(→p.191)。

②1885年には再び選挙区が
大きく改編されたが、議会の
上院(貴族院)が下院(庶民院)
とほぼ同等の権限をもち続け
るなど、地主の影響力は存続
した。また女性参政権も実現
しなかった。

③この飢饉ではアイルランド
人口の約25%に達する死者と
難民が生じた。難民の多くは
アメリカ合衆国に渡り、ヨー
ロッパから合衆国への移民の
一部をなした(→p.233)。

せずに各国の利害対立を調整することができたため、ナポレオ
ン戦争以降のヨーロッパでは基本的に平和が維持された(「パク
ス・ブリタニカ」)。

19世紀後半のイギリスでは、**ヴィクトリア女王** Victoria
在位1837~1901の統治のもと、
グラッドストン Gladstone
1809~98率いる自由党と**ディズレーリ** Disraeli
1804~81率いる保守党が、
総選挙の結果にもとづいて交互に政権を担当する典型的な議
会政党政治がおこなわれた①。最大の政治問題は議会改革であり、
第2回選挙法改正(1867~68年)で都市部の労働者の多くが、**第
3回選挙法改正**(1884年)で農村部の労働者の大部分が選挙権
を獲得した②。しかし、こうして選挙権が拡大した一方で、当

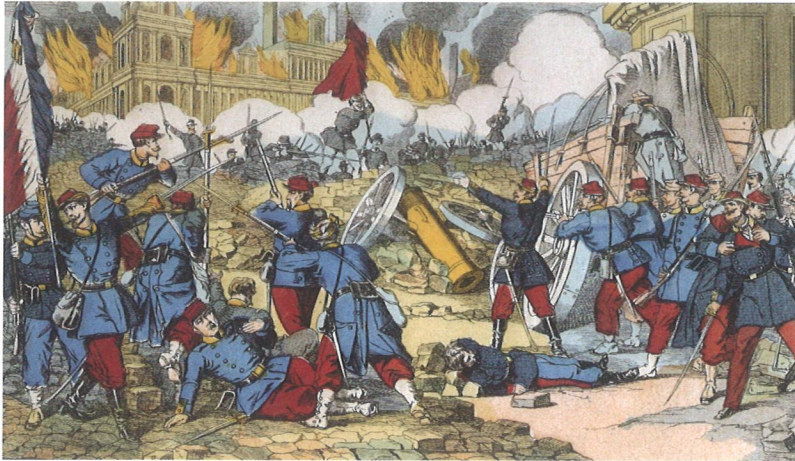
時のイギリスは従来の貴族制を維持し、**貧富の差**も大きい階級社会であ
った。また、主要な政治・社会思想であった自由主義を背景に、政府は
こうした経済格差に対して直接介入することはなく、個人の社会的地位
の上昇は、**勤勉・節約**などの自発的努力によるとされた。

他方、連合王国下のアイルランドでは、イギリス系人口の多い北部で
産業革命がおこったが、南部は1840年代後半に**大飢饉**(**ジャガイモ飢饉**)
に襲われ、これは19世紀のヨーロッパで最大の被害を出した災害となっ
た③。19世紀後半には、南部で農地紛争が激化したため、20世紀初めに
かけて政府が**地主制**を解体した。その一方で独立を求める動きも強まり、
1880~90年代にグラッドストンが**アイルランド自治法案**を議会に提出し
たが、帝国の解体につながると危惧した一部の自由党員が反対して否決
され、アイルランド問題は20世紀にもちこされることになった。

〈フランス第二帝政と第三共和政〉 フランスの第二帝政下では、**ナポレ
オン3世** →p.225が自由貿易によって国内産業を育成するため、イギリスと通商
条約を結び、イギリスにならってパリで二度も万国博覧会を開催した。

また利害の異なる支持基盤をまとめるため、**レセップス** Lesseps
1805~94の提案したスエ
ズ運河建設を支援し、第2次アヘン戦争・イタリア統一戦争・インドシ
ナ出兵などの積極的な対外政策を追求した。しかし、**メキシコ遠征** →p.251に失
敗し、さらにビスマルクの挑発に乗って、1870年にドイツ=フランス

(独仏)戦争(プロイセン=フランス戦争)をおこし、みずから捕虜になる
惨敗を喫したので、**帝政** →p.268は崩壊した。同年に臨時国防政府が成立して抗



「血の週間」 1871年5月21日に始まったパリ＝コミュン最後の戦闘。「血の週間」と呼ばれる市街戦ののち、28日、パリ＝コミュンは崩壊した。図奥がコミュン軍。

戦を続けたが、翌年には降伏した。

屈辱的敗北と領土割譲を受け入れた講和に抗議して、1871年3月に社会主義者やパリ民衆が立ち上がり、史上はじめての革命的自治政府を樹立した(パリ＝コミュン)。しかし、パリ＝コミュンは国内では広い支持を得られず、パリを逃れたティエールの指導する臨時政府側の軍事力によって、まもなく倒された。

その後、国内では王党派と共和派のあいだで将来の政体をめぐる対立が続いた。1875年に共和国憲法が制定されて④第三共和政の基礎がすえられ、80年以降はフランス革命を原点とする国民統合が進んだ。

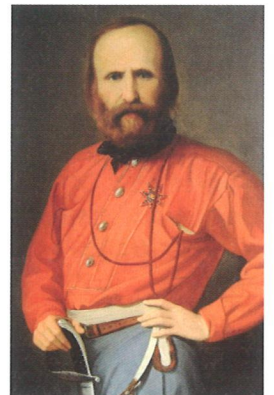
新国民国家の成立

Q> ドイツとイタリアの国民国家成立には、どのような共通点と相違点があるだろうか。

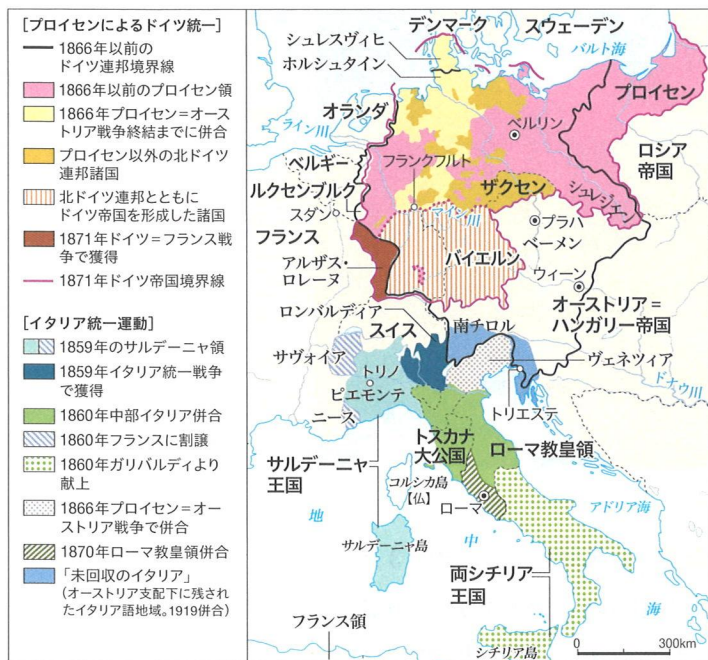
〈イタリアの統一〉 分立状態が続いていたイタリアでは、1848年の二月革命後、青年イタリア⑤のマツティーニも参加したローマ共和国建設の動きや、サルデーニャ王国のオーストリアとの戦争による北イタリア統合の試みがあったが、いずれも失敗した。しかし、サルデーニャ王国は自由主義的立憲体制を守り、新国王ヴィットーリオ＝エマヌエーレ2世と首相カヴールのもとで、鉄道建設など近代的社会基盤の整備をはかった。王国はナポレオン3世と支援の密約を結び、1859年に再度オーストリアと開戦した。王国は勝利してロンバルディアを獲得し、翌年サヴォイア・ニースをフランスにゆずって中部イタリアを併合した。同時に青年イタリア出身のガリバルディが義勇軍を率いて両シチリア王国を占領し、サルデーニャ王にゆだねた。

④ 制定されたのは3つの基本法だが、それが第三共和政の最後まで続いたので、憲法と呼ばれている。

⑤ 青年イタリアはイタリア統一と共和政をめざす結社で、1843年に再結成された。「青年」は既存の政治への抗議の表現で、当時ポーランドやアイルランドなどにも同名の結社ができた。20世紀初めには、トルコやアラブ地域にも青年の名を付した結社が結成された。



ガリバルディ 彼が率いた義勇軍の千人隊は、図のような赤シャツを着ていたので、「赤シャツ隊」とも呼ばれた。



イタリアとドイツの統一

①小ドイツ主義はオーストリアを除きプロイセンを中心にドイツ統一をめざす考えで、それに対して、オーストリアのドイツ人地域とベーメンを含めた統一案が大ドイツ主義である。

②ビスマルクが1862年に議会で「現在の大問題は議会の演説や多数決ではなく、鉄(兵器)と血(兵士)によって解決される」と演説したこと、こう呼ばれた。

にこもり、イタリア政府とは長く断交状態になった。
→p.289

〈ドイツの統一〉 1848年革命後、フランクフルト国民議会でのドイツ統一をめぐる対立は小ドイツ主義①的な自由主義憲法にまとまったが、プロイセン国王は国民議会の推挙によるドイツ皇帝位を拒否し、保守的姿勢を続けた。

プロイセンでは、保守的なユンカー層が主導する政府・軍部が優位に立っていたが、産業革命の進展とともに市民層出身の自由主義者が台頭し、議会多数派となった。このため政府と議会の対立が続き、国王は1862年ユンカー出身の保守強硬派**ビスマルク**を首相に任命した。ビスマルクは、議会の反対を無視して軍の拡大をはかった(鉄血政策②)。64年、プロイセンはオーストリアとともに、シュレスヴィヒ・ホルシュタイン両州をめぐる対立からデンマークと戦って勝利した。その後、両州の管理をめぐる紛争を理由として、66年にプロイセンはオーストリア・南ドイツ諸邦と戦って勝利した(プロイセン＝オーストリア(普墺)戦争)。これによってドイツ連邦は解体され、翌年プロイセンを盟主とする北ドイツ連邦が結成されて、南ドイツ諸邦とも同盟を結んだ。一連の勝利を受けて、自由主義者の多くがビスマルク支持に転じた。

一方、ドイツから除外されたオーストリアは、非スラヴ系のマジャー

この結果、1861年3月にイタリア王国が成立し、サルデーニャ国王がイタリア国王位についた。さらにイタリアは66年にオーストリア領のヴェネツィアを、70年にはローマ教皇領を併合して国家統一を実現し、71年にローマを首都とした。しかし、トリエステ・南チロールなどはオーストリア領にとどまったため、「未回収のイタリア」と呼ばれ、その奪回をめぐるオーストリアと長く対立することになった。一方、教皇庁はヴァチカ

ル人にハンガリー王国を認め、同君連合のオーストリア＝ハンガリー帝国(二重帝国)として、帝国内のスラヴ系諸民族の自立要求をおさえようとした。しかし、スラヴ系の自立運動はその後も続き、二重帝国を動揺させる大きな要因になった。

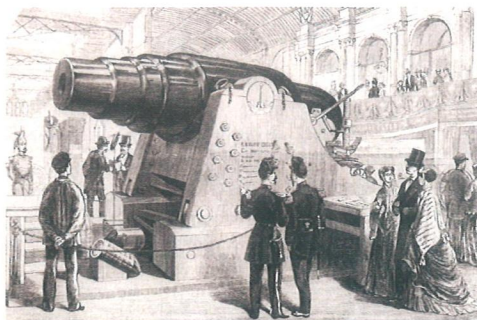
フランスのナポレオン3世は、プロイセンの強大化を阻止しようと、ドイツ＝フランス戦争を開始した。北ドイツ連邦と南ドイツ諸邦の支持を得たプロイセンはフランスを圧倒し、スダンでナポレオン3世を捕虜にした。1871年、ビスマルクは、フランスにアルザス・ロレーヌの割譲や高額の賠償金支払いを課した講和を結んだ。

ドイツ帝国と ビスマルク外交

▶ 新統一国家の国民にドイツ人意識をもたせるため、ビスマルクはどのような政策をとったのだろうか。

ドイツ＝フランス戦争中の1871年1月、プロイセン国王ヴィルヘルム1世はヴェルサイユ宮殿でドイツ諸侯によってドイツ皇帝に推挙され、ドイツ帝国が成立した。帝国はドイツの諸邦で構成される連邦国家で、プロイセン国王が皇帝を兼ねた。各邦の政治の仕組みは以前のままであったが、帝国議会選挙は当時としては先進的な男性普通選挙制であった。しかし帝国議会の権限は制約され、帝国宰相は皇帝にのみ責任を負い、独裁的権力を行使できた。

帝国宰相となったビスマルクは、帝国の国民統合を進めるため、反プロイセン感情の強いバイエルンなどの南ドイツやプロイセン東部の旧ポーランド領のカトリック教徒を警戒し、「文化闘争」で抑圧した。また、



クルップの巨砲 ドイツ統一はプロイセンの軍事力によって実現した。これを支えたのが軍需企業クルップであった。図は、1867年のパリ万博で展示されたクルップ製大砲。

④ ローマ教皇は、近代思想や近代国家の政教分離政策を批判していた。そのためビスマルクはカトリック教会の影響力を封じる抑圧策をとった。ドイツの自由主義者やプロテスタント系市民層は、それを「(近代)文化のための闘争」と呼んだ。しかし、カトリック教徒は結束を強めて対抗し、まもなく文化闘争は停止された。



ドイツ帝国の成立 1871年1月、ヴェルサイユ宮殿でおこなわれたドイツ皇帝ヴィルヘルム1世の即位式。ビスマルクは中央に白い軍服姿で描かれている。当時、パリ包囲中のドイツ軍はここに総司令部をおいていた。



工業の発展とともに増加する工業労働者階級へマルクス主義的社会主义運動(のちの社会民主党①)の影響が広がるのを防ぐため、社会主義者鎮圧法^{ちんあつほう}を制定し、他方で労働者の支持を得るため、災害保険、疾病・養老保険などの社会保険制度を導入した。

外交面では、ビスマルクは列強体制を再建させながら、ドイツへの報復^{ほうふく}を掲げるフランスをヨーロッパ内で孤立させる政策をとり、ドイツ・オーストリア・ロシアの三帝同盟

ベルリン会議後のバルカン半島

①ドイツの社会主义運動は2つの党派が並存していたが、1875年に合同した。その後マルクス主義を受け入れて、弾圧に屈せず勢力を増大し、1890年に党名をドイツ社会民主党とした。

(1873年)、ドイツ・オーストリア・イタリアの三国同盟^{もう}(82年)、ドイツ・ロシアの再保障条約(87年)などを結んで複雑な同盟網をつくりあげた。この国際体制はビスマルク体制と呼ばれる。

この間にも個々の列強の領土拡大政策は続いた。1875年、オスマン帝国のバルカン地域で農民反乱がおり、翌年にはブルガリアの独立をめざす蜂起が続いた。ロシアはスラヴ系民族の反乱や蜂起を支持したが、オスマン政府がこれを武力で鎮圧^{ちんあつ}したため、直接介入に乗り出し、77年オスマン帝国と開戦して、翌78年に勝利した(ロシア=トルコ戦争^{1877~78})。ロシアは講和条約であるサン=ステファノ条約¹⁸⁷⁸でブルガリアを保護下に置き、バルカン半島に進出した。

しかし、オーストリア・イギリスがロシアの進出に反対したため、ビスマルクはベルリン会議を開いて対立を調停し、サン=ステファノ条約は破棄された②。ロシアは南下のねらいを阻止^{そし}され、これ以後は中央アジア・東アジア方面で拡大を追求した。また、ビスマルクは1881年のフランスのチュニジア支配を支持するなど、列強の関心をヨーロッパ地域外への進出に向けさせて、ヨーロッパでの現状維持をはかった。

②また、ルーマニア・セルビア・モンテネグロの独立が承認され、ブルガリアはオスマン帝国内の自治国とされた。イギリスはキプロスの、オーストリアはボスニア・ヘルツェゴヴィナの占領と行政権を認められた。東ルメリア自治州は1885年以降、ブルガリアが併合した。

③フィンランドも長くスウェーデン領であったが、1809年にロシアに割譲された。

北欧地域の動向

Q 他ヨーロッパ諸国に比べて、北欧諸国が安定していたのはなぜだろうか。

18世紀においても北欧の強国とみなされたスウェーデンは、ロシア・プロイセンの台頭^{たいとう}でその地位を失ったが④、19世紀初めには立憲制議会主義を確立した。ノルウェーはウィーン会議によってスウェーデン領に

なったが、20世紀初めに国民投票で独立国家になった。デンマークもドイツ連邦に敗北して以後、農業・牧畜^{ほくちく}を中心とする経済基盤を安定させた。

スカンディナヴィア諸国と呼ばれるこれらの国々は、立憲君主制のも
とでも議会の力が強く、政治的・経済的に安定して、外交面では列強主
導の国際政治から距離をおき、独自の平和路線をとる点で共通していた。

国際運動の進展

▶ 国際運動の進展には、どのような背景があったのだろうか。

19世紀後半、帝国・国民国家の国境が安定すると、国内統合も強ま
ったが、一方で国境をこえて交流したり連帯する運動も増加した。なかで
も社会主義運動は、1864年に各国の社会主義者がロンドンで第1^{International}インタ
ーナショナルを結成して、労働運動に支えられた国際連帯運動のモデル
になったが、70年代半ばに解散した。政治的運動以外にも、戦争犠牲者^{ぎせいしや}
の救済のため国際赤十字組織が結成され、1896年にはスポーツを通じて

国際交流と親善をはかる国際オリンピック大会
も始まった。国際運動の展開には、郵便・電信
に関する国際機関の設立なども重要な基盤^{きばん}とな
った。

なお、19世紀は政治的・宗教的迫害^{はくがい}、貧困な
どからの脱出を求めて、ヨーロッパからおもに
南北アメリカに移住する人々が増えた。移民^{いみん}
というかたちでのヨーロッパの文化的・経済的拡
大と交流も、19世紀の重要な特色である。

第1回国際オリンピック大会
(1896年) 近代オリンピックは、古代ギリシアのオリン
ピアの祭典(→p.67)に着想を
得たフランスのクーベルタン
(1863~1937)によって創始さ
れた。写真は第1回大会開催
地であるギリシアのアテネの
メイン会場で、古代ギリシア
の様式にもとづいてつくられ
ている。その後、大会は4年
ごとに世界各地で開催される
ようになった。



アメリカ合衆国の発展

3

Q アメリカ合衆国の急速な発展の要因は、どのようなものだったのだろうか。

① 当時フランスを支配していたナポレオンは、サン＝ドマングを拠点にカリブ海から北米大陸中部に広がる帝国を築くことを構想していたが、ハイチ革命(→p.218)でこの構想が破れたため、ルイジアナ売却に踏みきった。

② このため戦後に工業の保護を目的とする高率の輸入関税が設定され、工業が未発達で自由貿易を望む南部と北部との対立が生じるようになった。

③ ジャクソンは、独立期以来の合衆国政治を担った政治家とは違い、西部出身で学歴もなかったが、独立独行の人間として新しい有権者から支持された。彼の任期の前後に、大統領選挙に投じられた票数は5倍以上に増加した。

アメリカ合衆国の領土拡大

Q 領土拡大は、アメリカ社会にどのような影響をおよぼしたのだろうか。

独立直後のアメリカ合衆国は、北米大陸の東部のみを領土としたが、その後フランスからルイジアナを購入して領土を倍増したのち①、スペインからフロリダを購入して、カリブ海にも到達した。一方、合衆国は通商問題をめぐってイギリスとアメリカ＝イギリス(米英)戦争をおこなった。戦争は戦前の状態を回復するかたちで講和されたが、結果として植民地期以来続いていた州ごとの独自意識が弱まり、アメリカ人としての自覚が強まった。また、戦争でイギリスからの工業製品の輸入がとどえたため、北部で産業革命が促進された②。

戦争後、アメリカ合衆国はモンロー宣言で外交方針を定めた。国内では、白人男性すべてに選挙権を与える州が増え、これを背景に、民衆の重視をとнаえてジャクソン③が大統領に当選した。彼の時代には、大統領のもつ国民一般の代表としての性格が強まり、合衆国政治の民主化が進んだ。一方、ジャクソン政権は狩猟経済を営む先住民の土地を安価で購入し、白人入植者に売却して農地に転換させた。さらに、これに応じた



先住民強制移住法

い先住民には、新たに獲得した領土に保留地を設けて強制移住させる政策をとった。

一部の先住民は武力で抵抗したが、鎮圧された。この結果、合衆国の農地は劇的に拡大したが、先住民の人口は激減した。

19世紀半ばには、アメリカ合衆国の西方への膨張(西漸運動)が、神に定められた

「Manifest Destiny 明白なる運命」であるとのスローガンのもと、合衆国はテキサスを併合した^①。これをきっかけにアメリカ=メキシコ戦争がおこると、合衆国は

勝利し、カリフォルニアを獲得して領土を太平洋岸に広げた。直後に同地で金鉱が発見されると、国内や世界中から多数の人々が到来して(ゴールドラッシュ)、西海岸地域は急速に発展した。この結果、合衆国は太平洋方面への関心を強め、19世紀半ばには、中国と正式な国交を開いたのち、ペリーを日本に派遣して日本の開国を実現したほか、1867年に

ロシアからアラスカを購入した。交渉を通じて1845年に南半分を獲得した。

アメリカ合衆国の西方への拡大は、奴隷制問題をめぐる国内の対立を強めた。奴隷制は本来、独立宣言の理念に反しており、北部諸州では廃止されたが、奴隷制プランテーションを経済の基盤とする南部諸州が州の自治権を盾に反対したため、合衆国憲法では禁じられていなかった。南部の奴隷制は一時衰退したが^②、18世紀末に綿の種子から繊維を分離する新式の機械が発明されると、大量の綿をイギリスや北部の綿工業地帯に原料として販売できるようになったため、19世紀に再び拡大した。

西部に新しい州が誕生するようになると^③、北部は人道主義の立場から新州での奴隷制に反対したが^④、南部は連邦議会での立場が弱くなることを恐れて、奴隷制を認めるように求めた。このため1820年には、奴隷制を認める新たな州は国土の南北のほぼ中間線以南のみとする妥協がはかられた(ミズーリ協定)。しかし、1854年にこの境界線より北のカンザス・ネブラスカの両準州について、奴隷制の可否は住民の投票で決定するとの法律が制定され、妥協は破られた。北部では奴隷制反対を掲げる

共和党が発足し、南部では民主党^⑤の一部が合衆国からの分離を主張するようになり、南北の対立が再燃した。



追われる先住民 先住民のチエロキー族は、「涙の旅路」と呼ばれた強制移住の途上で4000人の死者を出した。

① テキサスはメキシコの一部だったが、合衆国からの入植者を中心に独立したのち、合衆国への編入を求めている。

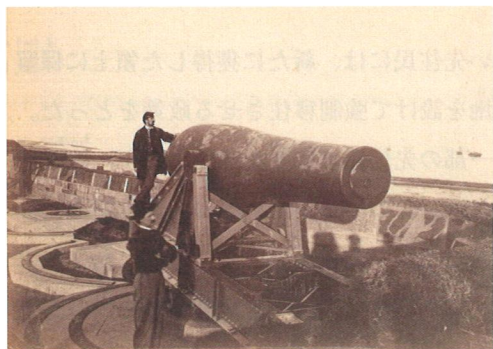
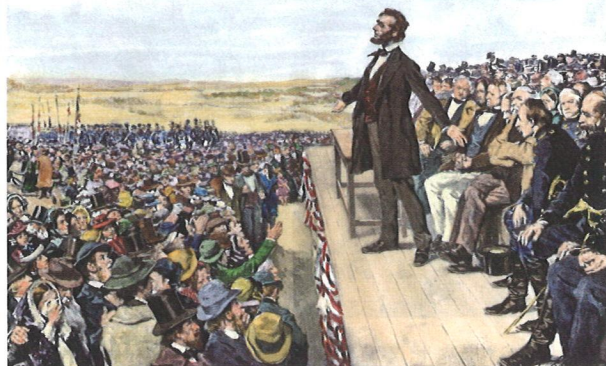
② イギリスとの共同管理地域になっていたオレゴンに関しては

③ 南部の主要な輸出作物だったタバコは、合衆国の独立後にイギリス市場を失っており、このため南部の農業は低迷していた。

④ 西部の開拓地では自由人の男性人口が5千人に達すると準州として自治政府を設け、6万人に達すると、州に昇格して連邦への加入が許された。

⑤ この頃、奴隷制を批判したストウ(1811~96)の『アンクル=トムの小屋』がベストセラーとなった。ただし、北部の反対は奴隷制自体に向けられたものであり、黒人に対する差別意識は存在していた。

⑥ 民主党は、独立直後の州権派(→p.211)に起源をもち、ジャクソン期に全国政党として成立したが、南北戦争前には、南部の農場主の利害を反映して奴隷制を容認していた。



南北戦争 工業力の拡大を背景に、南北戦争では写真のような巨砲や機関銃なども用いられた。

ゲティスバーグで演説するリンカン 1863年11月19日の演説で、リンカンは「人民の、人民による、人民のための政治」を訴えた。

南北戦争

Q▶ 南北戦争で北部が勝利した要因は何だったのだろうか。

1860年の大統領選では、^{どれいせい}奴隷制拡大をめぐる民主党が分裂し、共和党の^{Lincoln}リンカンが勝利した。^{1809~65(在任1861~65)}リンカンは、奴隷制を原理上は否定しつつも、南部での奴隷制の即時廃止にも反対する姿勢を示して、南部の分離を阻止しようとした。しかし、61年に南部の7州が^{Confederate States of America}アメリカ連合国^{1861~65}(南部連合)^{はっそく}を発足させて、ここにアメリカ合衆国は分裂した。南北間で戦闘が始まると、南部連合にはさらに4州が加わり、合衆国北部の23州との南北戦争(1861~65年)①となった。

①この戦争は、アメリカ合衆国では「内戦(Civil War)」と呼ばれる。

この戦争では、当初は士気が高く有能な指揮官の多い南部が優勢だったが、北部が人口と工業力の優位を活用しはじめると、戦線は^{こうちやく}膠着した。そこで北部は、1862年に西部公有地での開拓農民に土地を与える^{ホーム}ホムステッド法を定めて西部諸州の支持を固め、さらに63年にはリンカンが^{よろん}奴隷解放宣言を発して南部地域でも奴隷制を禁止し、国際世論も味方につけた②。北部は同年の¹⁸⁶³ゲティスバーグの戦いに勝利して、以降は優勢を保ち、65年に南部の首都^{リッチモンド}リッチモンドを占領して南部を降伏させ、合衆国は再び統一された。南北戦争は、発達した^{かき}火器や鉄道などの産業革命の産物が活用されたこともあり、アメリカ史上最多の死者③を出す戦争となった。

②すでに南北戦争前から、イギリスやフランスをはじめとするヨーロッパ諸国でも、アメリカ合衆国の奴隷制に反対する運動が展開されていた。

③南北戦争の戦死者数は60万人以上にのぼった。これはのちの第一次・第二次世界大戦(→p.279,308)におけるアメリカ人の戦死者数の合計を大きく上回るものである。

アメリカ合衆国の大國化

Q▶ アメリカ合衆国の歴史において、移民はどのような意味をもったのだろうか。

南北戦争後、^{こうはい}荒廃した南部の^{さいけん}再建と社会改革が北軍の占領下で進められた。北部の資本家が工業を導入し、また、合衆国憲法の修正によって

正式に奴隷制は廃止され、男性の解放黒人に投票権が与えられた④。しかし、黒人は法的には自由人となったものの、経済面では農地を与えられることはなく、多くは小作農として貧しい生活をおくった。他方で元南軍の兵士など一部の白人は、クー＝クラックス＝クラン(KKK)などの秘密結社を組織し、北軍の監視を逃れて黒人を迫害した。1870年代後半に



北軍が南部占領を終了すると、南部では旧大農場主や白人の自営農民、新興産業資本家らが、民主党を通じて政治を主導するようになり、北部を地盤とする共和党に対抗した。また、南部諸州は1890年頃から州法などで黒人の投票権を制限したり、公共施設を人種別にわけなどの差別を制度化したため、憲法の条項は骨抜きにされた。

西部では、南北戦争中から入植者が増加し、牧畜業や小麦生産が発達して食料を東部の市場に供給したほか、ヨーロッパへの輸出も始まり、アメリカ合衆国は世界最大の農業生産力をもつようになった。西部の発展にともない、東部と西部を結ぶ通信・交通機関も整備され、有線電信の開通につづき、1869年には最初の大陸横断鉄道が完成した。一連の西漸運動の進展によって、90年代にはフロンティア(開拓の最前線地域)の消滅が宣言され、合衆国が新生国から成熟した国へと完全に移行したことが明らかとなった。

他方、広大な国土と天然資源にめぐまれたアメリカ合衆国は、石炭・石油・鉄鋼などの重工業も躍進させ、19世紀末にはイギリス・ドイツをしのぐ世界最大の工業国ともなった。こうした合衆国の工業発展を支えたのは、急速に成長する独占企業とヨーロッパ各地から到来した移民であった。多くの移民が到来した結果、19世紀を通じて合衆国の人口は10倍以上に増え⑤、大西洋沿岸地域のニューヨークなどは巨大都市に成長した。また、移民の多くは低賃金の非熟練労働に従事したが、事業に成功して一代で巨大な富を得る者もいた。こうして、アメリカ合衆国は激しい競争と大きな貧富の差を抱える社会となった⑥。

1880年代以降に急増した東欧・西欧からの合衆国への移民を新移民という。また、中国人やインド人などのアジア系移民はクーリー(苦力)という蔑称で呼ばれていた。

大陸横断鉄道の開通 東西から建設された鉄道は、ユタ州で結ばれた。鉄道建設には、アイルランドや中国からの移民労働者も従事した。

④当時は自由人の女性も財産権や参政権で男性と差別されており、その是正を求める運動が南北戦争前から始まっていた。しかし、19世紀中に改革が実現したのは一部の州にとどまった。

⑤19世紀末以降には、日本からも移民が到来して、ハワイ(→p.267)や合衆国本土の西岸地帯で肉体労働に従事した。こうした大量の移民流入が社会問題となったため、19世紀末から20世紀初めに合衆国は移民法による移民の制限を開始した。

⑥1870年代の不況・低成長以降、合衆国各地で労働争議が続いたが、1886年に結成されたアメリカ労働総同盟(AFL)は熟練工を主体とする穏健路線をとった。これに加えて個人の自主性を尊ぶ文化もあったため、合衆国では社会主義(→p.223)は大きな勢力とならなかった。

- ・18世紀末から19世紀初めのドイツでは**古典主義**の文学が栄え、「ファウスト」を著した**ゲーテ**などが活躍した。また古典主義を代表する画家としては、**ナポレオン**の宮廷画家として有名なフランスの**ダヴィッド**がいる。

・ロマン主義

- ・「レ＝ミゼラブル」の
ヴィクトル＝ユゴー
- ・ギリシア独立戦争に参戦した
イギリス人「チャイルド＝ハロ
ルドの遍歴」の**バイロン**
- ・「民衆を率いる自由の女神」を
描いた画家の**ドラクロワ**など

・写実主義

- ・スタンダール
- ・バルザック
- ・ドストエフスキーなど

・自然主義

- ・ゾラ
- ・「人形の家」を著した
イブセンなど

・後期印象派

- ・セザンヌ
- ・ゴーガンなど

4

19世紀欧米文化の展開と市民文化の繁栄

Q▶ 19世紀欧米の文化と現代の文化には、どのようなつながりがあるだろうか。

文化潮流の変遷と 市民文化の成立

Q▶ 各時代での主流な文化について、その担い手や展開された場(空間)はどのように変化したのだろうか。

フランス革命後、ヨーロッパでは皇帝・国王・貴族・高位聖職者など
→p.212
の上流社会が主導した宮廷(貴族)文化は後退した。19世紀に入ると市民
層が担う市民文化が登場し、さらに同世紀後半には、国民文化の潮流が
主流になり、文化を享受する人々も一部の特権階層から市民層へ、さら
に国民一般へと広がった。しかし、先行文化の成果もそれぞれの国民・
民族の言語文化や歴史にそって選択され、伝統として引き継がれた。国
民文化は貴族文化・市民文化の融合の産物として成立し、学校教育や美
術・建築・音楽・文学などを通じて、国民に国家の一員あるいは民族と
しての自覚を与え、国民国家への統合を促進した。

交通革命や、電信・電話、大衆新聞の登場などの通信革命といった近
代諸科学にもとづく技術革新の飛躍的展開、さらに教育体制の整備も国
民文化の浸透に貢献し、ヨーロッパの国民文化は19世紀末までには全体
としてヨーロッパ近代文明にまとまった。欧米列強の帝国主義による「世
界の一体化」の進行とともに、ヨーロッパ近代文明は近代世界の基準と
され、世紀末には、世界を「欧米文明世界」、中国・インド・日本などの
「文明途上世界」、アフリカなどの「未開世界」の3つに区分するヨーロッ
パ中心主義的な見方がとなえられた。

各国の国民文化の展開

Q▶ 国民文化は、国民国家形成にどのような影響を与えたのだろうか。

フランス革命とナポレオンの大陸支配は、啓蒙思想や合理主義にもと
づく改革や法体系をヨーロッパ各地に広めた。しかし、まもなく各地域
固有の伝統文化や慣習を無視した画一的な制度の導入、さらに軍事占領
への反発と抵抗が広まった。この動きのなかから、それぞれの地域や民
族に固有な言語・歴史文化を見直して、民族精神や起源を見出そうとし
たり、個人の感情や想像力を重視する多様な思想や運動が生まれた。こ

【美術】

タヴィド〔仏〕…「ナポレオンの戴冠式」
 ドラクロワ〔仏〕…「キオス島の虐殺」
 カスパール＝フリードリヒ〔独〕…「月をながめる2人の男」
クールベ〔仏〕…「石割り」
ミレー〔仏〕…「落ち穂拾い」
 モネ〔仏〕…「印象・日の出」
 ルノワール〔仏〕…「ムーラン＝ド＝ラ＝ギャレット」
 セザンヌ〔仏〕…「サント＝ヴィクトワール山」
 ゴッガインズ〔仏〕…「タヒチの女たち」
 ロダン〔仏〕…「考える人」(彫刻)
 ゴッホ〔オランダ〕…「ひまわり」

【音楽】

ベートーヴェン〔独〕
 シューベルト〔オーストリア〕
 ショパン〔ポーランド〕
 ヴェルディ〔伊〕
 ヴァグナー〔独〕
 ドビュッシー〔仏〕
 チャイコフスキー〔ロシア〕
 スメタナ〔チェコ〕

【文学】

ゲーテ〔独〕…「ファウスト」

ハイネ〔独〕…「ドイツ冬物語」
 グリム兄弟〔独〕…「グリム童話集」
 ディケンズ〔英〕…「オリヴァー・トウィスト」
ヴィクトル＝ユゴー〔仏〕…「レ・ミゼラブル」
スタンダール〔仏〕…「赤と黒」
 バルザック〔仏〕…「人間喜劇」
 ボードレール〔仏〕…「悪の華」
ゾラ〔仏〕…「居酒屋」
ドストエフスキー〔ロシア〕…「罪と罰」
 トルストイ〔ロシア〕…「戦争と平和」
 イブセン〔ノルウェー〕…「人形の家」

ロマン主義(カスパール＝フリードリヒ「月をながめる2人の男」) 古木のあいだから月をながめる2人の描写は、ロマン主義美術の重要な主題の1つである自然への畏敬の念を表している。各国のロマン主義の芸術家は、民族や地域に根ざした画題を好んだ。



写実主義(クールベ「石割り」) クールベは、社会の底辺にあった労働者を主役として、彼らの現実の生活をありのままに描いた。なお、この作品は第二次世界大戦中のドレスデンへの爆撃で焼失した。

の文化的潮流を**ロマン主義**と呼んでいる。ロマン主義はとりわけ音楽・文学・芸術などの分野に大きな影響をおよぼし、国民文学や国民音楽に結実して国民文化の形成を推進した。

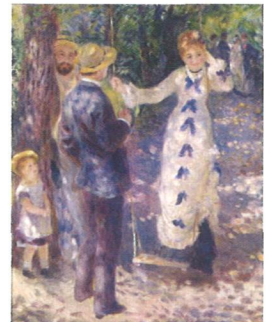


19世紀欧米の美術

5 19世紀後半には、市民社会の成熟、近代科学・技術の急速な発展、工業化による社会階層の格差の広がりなどで、人々の意識も変化した。ロマン主義は現実の動向をみていないと批判され、社会や人間の抱える問題に向き合おうとする**写実主義**(リアリズム)が登場し、社会や人間を科学的に観察する**自然主義**も広がった。外光の観察から対象の描き方自体を見直そうとするフランス絵画の**印象派**も、この流れの1つである。

※1

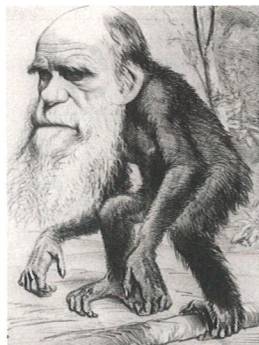
ナショナリズムと国民国家は、その正当性の根拠を民族や国家の歴史に求めたので、歴史への関心が高まった。ドイツの**ランケ**は厳密な史料批判にもとづく実証主義的な近代歴史学の基礎をつくり、以後、人文・社会科学でも歴史的考察や分析方法が利用されるようになった。



印象派(ルノワール「ブランコ」) ルノワールは、アトリエから出て、色彩を優先して屋外の光を描いた。印象派の画家たちは、おもに光の観察に重点をおき、屋外で制作をすることが多かった。

※1

19世紀末に出現した印象派から影響を受けながらも、自分の心の中にある感覚や感受性を重視して様々な展開をみせた画家たちの総称を**後期印象派**という。4. 19世紀欧米文化の展開と市民文化の繁栄 239



「尊敬すべきオランウータン」と題されたダーウィンの戯画
ダーウィンの説が呼びおこした当時の世論の驚きや反発が示されている。

近代諸科学の発展

Q 近代諸科学が発展し、その成果が広まったのはなぜだろうか。

19世紀は近代科学が全面的に開花し、急速に発展した時代であった。その背景には、フランスやドイツで設立された大学や研究施設が研究・教育の拠点として各国に広まるとともに、近代科学の方法や成果が学ばれて、新たな発見や改善をうながしたことがあった。

哲学や政治・社会思想では、カントが確立したドイツ観念論哲学が継承・発展されて、ヘーゲルの弁証法哲学やマルクスの史的唯物論を生み出した。資本主義が進んだイギリスでは、近代社会に生きる市民に指針を与えるベンサムBentham 1748～1832の功利主義やスペンサーSpencer 1820～1903の経験論哲学があらわれた。経済学においても、イギリスではアダム＝スミスの流れを引くマルサスMalthus 1766～1834、

リカードらの古典派経済学が、自由放任主義は経済発展をうながすと主張した。これに対して、ドイツのリストList 1789～1846

は後発国の国民経済には国家の保護が必要と考え、ドイツ関税同盟の結成を説いた。

諸科学のなかでもとくに発展し、社会を変貌させたのは、自然科学と電機・化学など実用工業の分野であった。

自然科学では、ダーウィンDarwin 1809～82による生物学の革新が、人文・社会科学にも、また社会全体にも大きな影響を与えた。彼が『種の起源』で提唱した進化論は、人間が生物のなかで特別な存在ではなく、その一員にすぎないと指摘して、キリスト教にもとづく人間観を信じていた欧米の人々に衝撃を与え、激しい論争を巻きおこした。19世紀後半にはコッホKoch 1843～1910やパストゥールPasteur 1822～95らによる細菌学や予防医学が近代医学の基礎を確立した。それとともに、公衆衛生の知識も広まり、幼児死亡率の低減や、平均寿命の伸長が進んだ。

実用工業では、化学・電気通信・交通部門における発明や技術革新は、日常生活に直結するものが多く、人々の生活スタイルや移動方法を大きく変容させた。

19世紀後半には、ヨーロッパ人になお未知であった世

19世紀～20世紀初めの自然科学・技術・探検

【自然科学と技術】

マイヤー [独]・ヘルムホルツ [独]	エネルギー保存の法則
ファラデー [英]	電気化学・電磁気学
レントゲン [独]	X線の発見
キュリー夫妻 [仏・マリ＝キュリーはポーランド出身]	ラジウムの発見
ダーウィン [英]	進化論の提唱
メンデル [オーストリア]	遺伝の法則の発見
バストゥール [仏]	狂犬病予防接種の開発
コッホ [独]	結核菌・コレラ菌の発見
モース (モールス) [米]	電信機とモールス信号の発明
エディソン [米]	電灯の発明
ベル [米(英)*]	電話の発明
マルコーニ [伊]	無線電信の発明
ディーゼル [独]	ディーゼル＝エンジンの完成
ノーベル [スウェーデン]	ダイナマイトの発明
ライト兄弟 [米]	プロペラ飛行機の発明

【地理学的学術調査と探検】

アフリカ探検	
リヴィングストン [英]	南アフリカ調査
スタンリー [米(英)*]	アフリカ大陸横断
極地探検	
ピアリ [米]	北極点到達 [1909]
アムンゼン [ノルウェー]	南極点到達 [1911]

中国奥地・中央アジア学術調査探検

ヘーデン [スウェーデン]	楼蘭の発掘
スタイン [英]	敦煌の調査

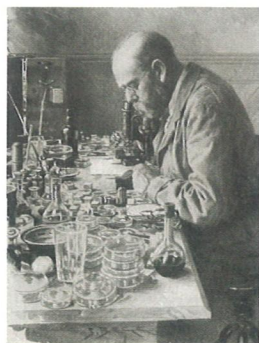
[出身地] *は[主要活動地(出身地)]

独＝ドイツ 英＝イギリス 仏＝フランス

米＝アメリカ合衆国 伊＝イタリア

「発明王」と呼ばれたエディソンは、蓄音機や映画も発明した。

界や地域を踏査し、現地の資源と人々の状況を明らかにする探検・調査も盛んになった。それまで沿岸地域しか知られていなかったアフリカ内陸部の調査や、中国奥地・中央アジアの学術調査もおこなわれた。20世紀に入ると、最後の秘境と呼ばれた極地の探検も国の威信をかけて競われた。この結果、1880年代以降になると、欧米諸国は世界各地の実状に関して多くの情報を得たが、それは各地の理解を深めただけでなく、欧米のみが近代化に成功し、先進的地位を占めたとの自負を強めることにもなった。



コッホ 細菌の研究に従事し、1882年に結核菌、83年にコレラ菌を発見したほか、ツベルクリンや細菌の培養法なども開発した。破傷風の血清開発やペスト菌の発見で知られる北里柴三郎は、彼のもとで学んだ。

近代大都市文化の誕生

Q 大都市文化によって、都市の景観はどのように変化したのだろうか。

19世紀後半には、列強諸国の首都は近代化の進展や国家の威信を示す象徴的な場になった。フランス第二帝政期のオスマンによるパリ大改造やウィーンの都市計画はその先がけとなった。いずれも密集した古い街区や城壁を取り壊して街路を拡張し、コレラなどの感染症の流行の一因となっていた非衛生的な家屋を近代的建築にかえ、上下水道を普及させた。さらに地下鉄や電車を導入して都市交通網を整備するなどして、他都市のモデルとなった。ロンドンでは1851年に第1回万国博覧会が開催されたが、つづいてパリ、ウィーンでも万博が開かれ、近代産業の発展を伝え、首都の近代的変容を誇示した。首都には多数の聴衆を収容するコンサートホールや博物館・美術館・図書館などの文化・娯楽施設が拡充され、市民文化の成果の集積地になった。世紀末には一般大衆向けに多数の大衆紙が発行され、発行部数が100万を超える新聞も現れて、国内外の最新情報を伝えた。また、巨大なデパートや新たに映画館などの大衆商業・娯楽施設も増え、市民文化の成熟から大衆文化の萌芽がみえはじめた。

生活・居住環境の快適さや便利さ、さらに情報や近代文化の発信地になった大都市は、農村から都市へ、中小都市から大都市への人の移動を加速させた。19世紀後半の都市化は、都市の数を増やしたことよりも、既存の都市が人口増によって大都市化した点に特徴があった。

パリの下水道 オスマンは街路の整備などのほか、上下水道の大規模な改造を実行し、感染症の発生阻止など公衆衛生の基盤拡充にもつとめた。

